

連載 クオリア・テクニカ



イラスト＝浅生ハルミン

もぎ・けんいちろう

東大理学部、法学部卒業後、東大大学院物理学専攻課程修了。ケンブリッジ大学などを経て、現在はソニーコンピュータサイエンス研究所シニアリサーチャー。専攻は脳科学。著書に『脳内現象』『意識とはなにか——〈私を生成する脳〉』『脳の中の小さな神々』『脳と仮想』など多数。

qualia technica

しばらく前には、コンピュータのオペレーティング・システムが、ITにおける主戦場であった。今や人々の関心はインターネット上で大量の情報をいかに流通させ、検索し、マイニングするかに移っている。例えば、検索エンジンの「グーグル」が、人々にとっての情報技術の最先端を象徴する存在になっている。

インターネット上の大量のデジタル情報を扱う上で、重要なのはいかに情報の間に文脈（コンテキスト）を付けるかということである。たとえば、ウェブページのハイパーリンクは文脈の一例であ

る。個人日記などを記すためのツールとして人気のあるブログにも、コメント、トラックバックなどの文脈を形成するためのツールがある。文脈が、ますます増大するネット上のデジタルコンテンツの有機的使用のために不可欠な要素であることは言うまでもない。

それでは、そのような文脈と、私たちの知覚品質の中核にあるクオリアとの関係はどのようなものだろうか？

現代アートの世界では、すでに、文脈とクオリアとの間の一種の緊張関係が明らかになっている。

現代アートの始祖としてまず名前が上がるのがマルセル・デュシャンである。デュシャンは、一九一七年、ニューヨークで行われた展覧会に便器を持ち込み、それが『泉』という芸術作品であると主張した。市場にある既製品をそのまま、あるいは僅かな加工をして芸術品とする「レディ・メイド」の手法を用いて、それまでの芸術観念を覆そうとしたのである。

日常生活という文脈に置かれたままでは、単なる実用品であるものが、美術館の中での展示の文脈に置かれた瞬間、芸術品になる。デュシャンの手法は、一見過激に見えて、その実私たち人間の認識のメカニズムの本質を突いている。

文脈によってモノの意味が変わるという「文脈主義」なしに、現代のアートは理解できない。オノ・ヨーコによる、透明な台の上に本物のリングを置いた作品『アップル』も、文脈主義的に構成されている。台所に置いてあれば単なる食べ物であるリングが、美術館の中の注意深く用意された

文脈に置かれることで、現代アートのオブジェに
なってしまうのである。

同じものでも、それがどのような文脈に置かれ
るかでその意味が変わってくるというデュシャン
に始まる現代アートの手法は、大量のデジタル情
報の間に文脈を張ることで付加価値を生み出す、
ネットワーク上のITの手法と通底している。

現代アートにおける行き過ぎた文脈主義に対し
ては、反省、批判がある。美術展の企画、制作に
たずさわるキュレーターが、行きすぎた文脈を設
定すると、作品それ自体の印象に注意が向けられ
なくなってしまう。ヨーロッパでは、政治的な視
点から美術展が企画されることが多いが、そのよ
うな傾向が行きすぎると、アートが単なる政治的
広告の道具になってしまう。

国際市場における最近の日本のアートが、「オ
タク」や「スーパードラッグ」といった文脈にお
いて語られる傾向があることにも、似たような危
険性がある。

そもそも、最良のアート作品が私たちに与える
感動とは、どのような文脈にも回収することがで
きないものである。作品を前にした時に感じる、

どんな言葉にもできないクオリアこそが、その作
品の質を決める。今日でこそ、モネ、ルノアール、
ゴッゲンといった画家の絵は、「印象派」の絵
として確立した人気を誇る。しかし、これらの絵
を単に「印象派」という文脈でくくってしまった
は、アートとしての体験の本質がかえって見失わ
れてしまう。

行きすぎた文脈主義が、人間の脳が本来持つて
いる感じる力、感動する力を奪ってしまう。ここ
にこそ、インターネット上のデジタル情報を扱う
ITが陥りかねない危険性があるのである。

どこかに旅行したいと思った時に、ホテルを検
索したり、交通手段を手配できたりする、という
意味では、インターネット上に設定された文脈は
便利である。グーグルをトップ・ランナーとする
デジタル情報の検索技術、マイニング技術は、今
後もますますダイナミックで、洗練された形での
文脈の構築を志向して行くことであろう。

その一方で、そのような文脈をいかに積み重ね
たとしても、旅先で出会う様々なものが私たちの
心に与える感動に迫ることができないのも事実で
ある。文脈とクオリアは、人間の認識において、

相補的な関係にある。対象に対して機能的に接し
ようとすれば、明示的に文脈を構築してそれに従
うのが便利である。一方、深い感動は意識の中で
感じるクオリアに由来する。言葉にもならず、文
脈にも乗らないクオリアに寄り添うことなしで、
深い感動、満足はあり得ない。

デュシャンの「泉」や、オノ・ヨーコの『アッ
プル』といった良質のアート作品は、明示的な文
脈を背負っている一方で、言葉にすることのでき
ないクオリアの体験の質においてもすぐれてい
る。このような、現代アートの作品における文脈
とクオリアの共存関係にこそ、感性を重視したIT
の今後の発展の方向性のヒントが隠されてい
る。

今のところ、ネット上のITは、明示的な文脈
の構築へ向けての技術に終始している。それが同
時にクオリアとしての知覚品質をも志向し始めた
時、インターネットが、本当に人間が求めている
ものを提供できるようになるためのパラダイム・
シフトが始まるだろう。